

□ 書評 □

秋元成太／西村泰司(編)

泌尿器科ベッドサイドマニュアル

小野寺昭一

(東京慈恵会医科大学泌尿器科)

臨床医学としての泌尿器科学の多様性については、改めて指摘するまでもないが、最近の泌尿器科学における新しい画像診断法の普及や治療法の目覚ましい進歩は、結果として膨大な量の情報を生み出すこととなり、泌尿器科専門医をめざすものにとって、増え続ける情報をいかに整理していくかが大きな課題となっている。一方で、第一線の泌尿器科臨床医あるいは専門医として知っておかなければならない基本的な診察法や処置の“コツ”も数多くあり、これらの技能をいかにして覚えていくかということも重要な問題である。このような、教科書や文献からだけでは会得することができない臨床医としての“ワザ”は、先輩のやり方を見よう見まねで覚えるか、あるいはマニュアル的な本を読んで身につけていくしかないが、正しい技法を学ばないと自己流に陥ってしまう危険性をはらんでいる。

これまで、泌尿器科診療マニュアル的な本はいくつか出版されているが、研修医あるいはレジデントが白衣のポケットに入れて持ち運ぶことができ、外来の急患の処置や病棟での対応に困った時に本当に実践的な面で役に立つマニュアルは少なかったように思える。

本書は、日本医大泌尿器科学教室ならびに関連病院で、実際に泌尿器科診療に携わっているスタッフが中心となって、特に臨床上高頻度にみられる疾患を重点的に選んで、それらの診断法、治療法が実地診療上の手引きとなるようにまとめられている診療マニュアルである。本書は、13の大項目と93にわたる小項目に分

けられてそれぞれがていねいに記載されており、ベッドサイドマニュアルとして必要とされる知識が最近のトピックスも含めて述べられている。

悪性腫瘍に関して言えば、すべての泌尿器科悪性腫瘍について病期分類とTNM分類が記載され、浸潤度診断法や臨床進行度別治療法などがそのままベッドサイドで応用できるように書かれている。実際に悪性腫瘍患者に遭遇した場合、その疾患の大まかな概念を把握し、病期診断のために必要な検査の予定を立て、病理的な検査の結果が判明した時点で正確な病期分類を行って予後因子を判断し、臨床進行度別に治療計画を立てるという一連の流れが、本書を手にするることによって自然に身についていくものと思われる。

本書はまた、“尿路結石”“神経因性膀胱”および“尿失禁”などの項目などにおいてもコンパクトに述べられているが、これらの項目のなかで特に“救急疾患”の項と“泌尿器科基本処置とトラブル対策法”の項の記載が優れている。“救急疾患”の項では、各臓器損傷の重症度診断とその治療法が簡潔かつ適切に述べられており、“泌尿器科基本処置とトラブル対処法”の項ではカテーテル挿入困難な場合の対処法や経皮的膀胱瘻造設法、腎瘻が抜去されてしまった時の処置などがone point adviceを折り込みながら、実地診療に即して記載されている。

本書は、いつも白衣のポケットに忍ばせておけば、診療手順のチェックやデータの判定、あるいは薬物処方量の確認に役立たせることができ、研修医クラスはもちろんベテランのドクターにとっても利用しやすい泌尿器科診療マニュアルになり得ると確信する。

(B6変型・ポケット判、頁368、図85、表35、1995、定価5,356円／税入、〒400、医学書院・刊)